

朱鷺の墓

— 空笛の章 —

五木寛之



朱鷺^と
鷺^き
の墓

— 空笛の章 —

五木寛之



新潮社

© 1969 Hiroyuki Itsuki Printed in Japan

朱鷺^{とき}の墓^{はか} —— 空笛の章 ——

昭和四十四年十二月十日發行
昭和四十六年九月十五日十一刷

著者・五木寛之

發行者・佐藤亮一

發行所・株式会社新潮社

郵便番号・一六二一

東京都新宿区矢来町七一

電話・東京(03)二六〇・一一一

振替・東京八〇八

塚田印刷株式会社

大口製本

定価五〇〇円

落丁乱丁本はお取替えします

朱鷺の墓

——空笛の章——

へとき

淡紅色の翼と尾を持つ鶴鷺目とき科の鳥。

学名 *Nipponia*

nippon, ウスリ、中国東北、朝鮮、中国北部、日本に分布する。わが国では現在、佐渡、能登などに、わずかに残生し、国際保護鳥として厳重に保護されている。和名、トキ。桃花鳥とも言う。亡びゆく美しい鳥である。

機一郎きいちろうは、風の中に髪をなびかせて立っていた。腕を組み、目を細めて、海の方を黙然とみつめている。

背後の大門山脈から吹きおろしてくる三月の風が、頭上の松の梢に鳴っていた。その風は、黒く光る屋根瓦の波をこえ、はるか河北潟を渡って、日本海へと吹き抜けて行く。

染乃そめのは、ひんやりと冷たい石段に腰をおろし、両手を頬に当てて機一郎を眺めていた。陽が翳かげったり、照ったりする度に、機一郎の横顔が違う人間の顔のように変わって見えた。

二人がいるのは、卯辰山の山上にある天満宮の境内で、齋とらひヶ峰と呼ばれる場所だった。卯辰山は、金沢の町を流れる浅の川べりの小高い山である。金沢城と向いあっている所から、向山むかいやまとも呼ばれていた。

染乃が五歳の時に養女として入籍され、そこで育った杉乃家すぎのやは、その卯辰山に近く、浅の川ぞいの一画にあった。俗に、東と言いならわしているその土地は、金沢の町では最も格式の高い花

街として知られていた。染乃は、日露戦争が始まって二年目の現在、東でも最も忙しい若手の芸妓の一人に数えられている。十六歳でお座敷に出てから、すでに五年あまりの年月が過ぎていた。機一郎は、常連の客の中でも、染乃が最も甘えられる遠慮のない客の一人だった。

金沢でも有数の織物工場主の長男で、商売の腕もある機一郎は、年に似合わず遊びの方も達者だった。遊び慣れている、というのではなく、見栄やてらいのない開けっぴろげの率直さと大胆さが、皆に好かれていた。勿論、彼の人気の背後には、父親の雁木治三郎の財力が大きく物を言っていたのは当然だろう。

しかし、そんな事とは関係なく、染乃は機一郎に好意を抱いていた。お座敷で遊んでいる時の機一郎には、どんな時でもどこか一点、醒めている部分があるように思われた。皆に調子を合わせて陽気に騒ぎながら、どうせこんな事はむなしい遊びに過ぎぬ、と呟いている機一郎の心の内が、彼女には不思議に判るような気がするのだった。

この人の目は何か違う所を見ている、と染乃はいつも感じていた。だが、いま、風の中に立って、はるかな日本海をみつめている機一郎の目は、そうではなかった。それは彼が見たいものの方へ、まっすぐ向けられているように思われた。

「何を見ておいでます？」

と、染乃は聞いた。

「海の向うの土地さ」

機一郎は答えた。「あの日本海に向うに、どんな土地があると思う？」

「さあ」

「アムール河、浦塩^{ウラジヨ}、バイカル湖、シベリア大陸——でかい土地だ。こんな猫の額みたいな金沢とは大違いやな。見てみる、ほら」

「どっちの方ですけ」

染乃は立ち上って、機一郎と並ぶと、両手を双眼鏡のように丸めて海の方をのぞいた。

「何にも見えんわ」

「女には見えんだろう」

と、機一郎は言い、まぶしそうに空をあおいだ。「男には見えて、女には見えんものが世界にはあるんだ」

「ほんまに、そんなもんがあるがやろか」

と染乃は、黒ぐろと鉛色に光る日本海の水平線をみつめながら小声で呟いた。

「ああ。あるな」

「ほんなら、女に見えて男に見えんものもあるがやろうね」

「さあ、それはどうか」

「うち、それを見たい——」

機一郎は染乃の顔を驚いたように眺めると、突然、愉快そうに笑い出した。

「まったく変った女やな、お前は」

「ほうやろうか」

「そうだ。お前にはどこかこの土地の女たちと違った所がある。自分ではそう思わんか」

「さあ。うちには判りません」

染乃は首をすくめて、くすりと笑った。機一郎は再び空をあおぐと、大声で何か言った。え？と聞き返す表情の染乃に、

「ヴェスナー、と言ったのだ」

「それ、なんですいね」

「ヴェスナー、つまりロシア語で、春のことだ。ヴェスナー、レート、オーセニ、ジマー。春夏秋冬だ。判るか」

「機一郎さん、どこでそんな言葉をおぼえなされたんです？」

「これだ、これだよ」

機一郎は懷ろから一冊の赤い表紙の本を取り出し、少年のように目を輝かせて頁をめくった。

「この日露会話の本は、もう市内の書店には一冊もないそうだ。おれは先月、東京へ商用で行った時、神田の書店でこいつを手に入れたのだ。先見の明というやつやな」

「そういえば、今日もロシア兵の捕虜が着くそうやけど——」

「うむ。このちっぽけな城下町に、六千人からの捕虜が来るんや。町のやつらが大騒ぎしよるのも無理はないやろ」

「うちの菊弥ねえさん、今日お客さんに捕虜見物に連れていってもろうとるがやて」

「今日は将校も着くとかいう話だったな」

機一郎は、ヴェスナー、レート、オーセニ、ジマー、と、もう一度呪文のようになえて本を懷ろにもどした。

「腹がへった」

「家に寄って、お茶漬けでも召上っていきまさらん？」

「うむ。そうするか」

機一郎はうなずくと先にたつて、千杵坂ちきざかの石段をゆっくりと降りて行つた。梅谷から紅葉谷を見おろす帰厚坂きこうざかを下り、天満宮の一の鳥居をくぐると、風がやんだ。染乃は、機一郎から数歩はなれてついて行つた。昼間から男と並んで歩く事は、さすがにはばかられたからである。

この人がもっと老人で、目立たぬ男だったなら、と、染乃は機一郎の渋いこげ茶の結城の背中を眺めながら考へた。それならば並んで歩いた所で、気がひけることはあるまい。この町に多い、旦那と妾の、ごくありきたりの散策と人を見るだろう。

だが、機一郎は、若くて大柄の、人目を引く青年だった。美男子というのではない。だが、男らしく濃い眉と鋭い目、真直ぐな鼻梁と、やや張つた頬骨が、どんな場所においても彼を目立たせた。五尺八寸はあるだろう、引き緊つた体格で、顔の色だけが白い。ひげの剃りあとが青々と鮮やかだった。父親の雁木治三郎が、異相の小男であるのに、機一郎は全く父親に似ていなかった。

商売を嫌い、東京で上の学校へ進みたいという機一郎の希望は、治三郎の反対で挫折し、その後、彼は家業をついで父親を助けている。だが、三十六歳という若さが、彼にはまだ残っていた。

製品の販売や、品質の改良に、父親を満足させる働きを示しながら、機一郎はまだまだに得体の知れない情熱を体の奥にくすぶらせているようだった。

彼は与謝野晶子の歌を読んだり、こっそり幸徳秋水らの書いたものを東京から送らせたり、時には上京して川上音二郎の芝居を見たりもした。

土地の大地主の娘と結婚して八年ほどたっている。なぜか子供はまだ出来なかった。週に数夜は、東の杉乃家で芸者をあげて遊んだ。時には今日のように、昼間からふらりと現われて、染乃や外の妓たちを散歩に連れ出してくれたりもする。どんなに派手に遊んでも父親が苦情を言わないのは、機一郎にそれだけの甲斐性があるからだろう。関西や東京だけでなく、外国との製品の取引に際して、機一郎は無くてはならない存在だった。

彼は東で遊ぶ時だけでなく、市内の料亭や旅館で宴会などを催す折にも、必ず染乃を呼んだ。機一郎と染乃の間を、人々は何かと噂し合っていたが、実際には何もなかった。杉乃家の経営者である杉野ハツは、それとなく機一郎に染乃の旦那にならないかと持ちかけていた。しかし、機一郎は、

「旦那が要るなら誰か外の男を探せ。おれは染乃の座敷の客で充分だ」
と言って笑うだけだった。

それは染乃にしても同じ事だった。将来は杉乃家をついで女主人となる立場だったし、今のままの形で機一郎に可愛がられている方が、気持が良かった。といって、よくある形での浮気もしたくはなかった。そんな生臭いものでなく、肉親の兄のような対し方で染乃は機一郎を大切に思

っていたのである。

卯辰山の坂を降り切ると、浅の川にかかる天神橋のたもとに出た。春の陽光を反射して川の流
れは白く光り、底の小石にまで淡い陽ざしが揺れていた。

川にそって目にしみるような鮮やかな柳の緑が、あふれんばかりに水面にたれさがっている。

その間に、半ば散りかけた白い桜が、しほりの模様のような柔らかな遠景をつくっていた。上流
の空に、まだ雪を残した山々が、くっきりと見える。

「綺麗やわねえ」

と、染乃は川べりの道路の端に立ちどまって、機一郎を振り返った。

「うむ」

綺麗なのはお前の方だ、と思いながら機一郎はその眺めを背にたたずんでいる染乃を眺めた。

いつも座敷で近くから見ているだけに、こうして自然の風景の中においてみると、また違った
美しさが染乃の姿にはあった。陽光の下にさらして、少しも傷ましい感じがしないのは、彼女の
二十一歳という若さのせいだけではないようだった。

染乃という女には、どこか外へ向って大きく開こうとするような、そんな何かがある、と機一
郎は感じていた。それは彼が接する他の女たちには無いものだった。それはこの古いよどんだ空
気の中に生きている金沢の町の女たちの持つていない何かだ。だが、染乃自身は少しもそれに気
付いてはいない。そして、その事が殊に機一郎の気持を惹くのかも知れなかった。東の若手では
一番の器量よしといわれる染乃だが、それは決して人形のような形の上の美しさではなかった。

一見、弱々しくさえ見える彼女の中に、ひどく一途なものがひそんでいるのを、機一郎は見抜いているのだった。

染乃は天神橋の中ほどまで歩いて行き、橋の上から川の面を眺めていた。男の子が数人、裸足で浅瀬にはいつている。ゴリでも取っているのだろうか。

「何を見てる？」

と、機一郎が近づいて来て言った。

「こんな歌、知っておいでなさるか」

染乃は両手を橋のらんかんにかけて、遠くを見るような目つきで小声で歌った。

こうかごり

こまいかごり

岩の間より

そっと出てござれ

「知らんな」

「ご存じないけ」

「何の歌だ」

杉乃家によく来る老人の客から教わった歌だ、と染乃は言った。昔の子供達が川でゴリをすく

う時となえた文句だという話だった。川にはいって、右の手に餌を乗せ、左の手を水にひたしてじっと動かさず、餌の方の手を静かに振ってその歌をうたえば、ゴリは自分から水中の掌の中へ入って来る、というのである。

「そんな馬鹿な」

と、機一郎は染乃の話を聞いて、面白そうに笑って、

「ゴリは、ゴリ押しでとるものだ。さあ、行こう」

「おなかがすきましたか」

二人は後もどりして東へ続く低い家並みの路地を抜けて行った。

「染乃——」

「はい」

「それじゃ、お前、こんな歌を知ってるか」

と、今度は機一郎が小声で歌った。

わっら　こどもども　遊ばんがいや

こんの寒いに何おいや

菊や　ぼたんの　花折りに

「さあ、聞いた事あるような、ないような」

「おれはこいつを鶴来の鉄砲政のじいさんにおそわった」

機一郎は、向うから来る豆腐売りの車を軒下によけながら、歌を続けた。

一本折っては腰にさし

二本折っては笠にさし

三本目に 日が暮れて

あっちの宿屋にとまろっか

こっちの宿屋にとまろっか

こっちの宿屋は餅つきで

こっちの宿屋にとまったら

蓆がはしこて 夜が長うて

「ここまでしか憶えとらん。後は忘れた」

と、機一郎は言った。

公爵カンタクージン大佐以下、三十七名のロシア軍將校捕虜一行が金沢に到着したのは、明治三十八年三月二十九日の午後だった。

彼ら將校団は、従卒三十五名をしたがえ、少しも悪びれた風情を見せず、堂々とプラットホームに降り立った。

駅の構内には、着剣した金沢九師団の兵士五百名あまりが、整然と並んでいた。ロシア將校団は、その前を通訳につきそわれて改札口を通り、駅頭に姿を見せた。

その日は気候の悪い北陸にはめずらしく晴れた日だった。金沢は、新潟県ほどではないが、雪の深い土地である。大陸からの季節風と、日本海の暖かい対馬海流に加えて、背後にひかえた高い山脈が、一年を通じて多くの雨や雪を降らせた。一年を通じて、快晴の日はわずか三十日前後ともいう。

しかし、そんな土地だけに、美しく晴れあがった日の爽やかさは格別だった。春から夏にかけての変わり目には、しばしば息をのむような快晴が訪れる事がある。長い、暗い冬から解放される喜びも加わり、晴れた日は町の人々の表情も明るかった。捕虜として金沢に送られて来るロシア

將校たちを、一目見ようと駅前が集まって来た群集は、久しぶりの青空の下で陽気にひしめきあっていた。

その月の十日、日本軍が奉天で三十四万のロシア軍と対決し、大勝をおさめてから、金沢の町も急に活気を増して来ていた。

中でも市民を驚かせたのは、奉天大会戦のロシア兵捕虜、約六千名を金沢に收容するというニュースである。前田藩政時代以来、外部の人間を容易に中に入れない閉鎖的な城下町だっただけに、町中はその噂で持ちきりだった。

三月十三日付の北国新聞は、次のような論説をかかげて市民に呼びかけている。

——奉天の俘虜、近日わが金沢に来らんとすと伝ふ。彼や百戦百捷の勇士にあらず、いまだもつて名督の軍兵といふべからざるも、祖国の為に一身を捧げて弾尽き銃折るるに至るまで善く奮戦格闘したるは、また愛すべきにあらずや。彼を侮蔑し彼を辱するは、戦捷国民の態度にあらずと。聞くべきの言なりとす。義あり勇あるものは必ず血あり涙あり。彼がきたるの日において、市民は幸ひに彼を遇するの途を誤るなかれ。

そして新聞は、ロシア兵捕虜の内六千名を金沢に、一千名を敦賀に收容すると伝えていた。金沢では七連隊の施設や東西両別院、大乘寺、天徳院などの寺院のほか、特に將校捕虜のために兼六園内の県勸業博物館を改造して收容所にあてると発表された。